

『ヘラルゲ』 - 雨鼠

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

『おめでとう』

祝う側にいるのはこれが初めてではない。というより、多くの人間はそうであるはずだ。もし逆の、祝福される機会が上回る人間がいたら、その人とはあまり付き合いたくない。絶対に何か問題を抱えている。

だから、必然的に言祝(ことほ)ぐことばかりが目立つのだ。そんなことは分かっているのだが。

『羨ましい限りだね。お似合いだと思う』

友人の想いが実ったのだという。

異性と付き合い始めるとき、何だか夢の中において、それでいて醒めたような気分になる。それは好きな人を初めて抱くとき、衣擦れの音と共に相手の温度をこの身に受ける感覚に似ている。薄もやの中に潜んでいた世界が一つ、開けたような気分になるのだ。幸か不幸か一通り経験しているから知っている。知っているだけで、分かっているわけではない。

『頑張れよ』

と、締めくくって、送信。友人へのメールを打ち終え、パチンと携帯を閉じた。

いったい何を頑張るのか。

別れないように努力するという意味ではもちろんありえない。それではあまりに寂しすぎる。きっと、即時的な意味では「彼女を楽しませるために」なのだ。そうするうちに彼女も彼氏の笑顔を引き出そうと努めてくれる。そうすれば「互いに楽しめるように」さらには、「二人が安息を得られるように」そしてもっと高みへと至るものなのかもしれない。

「どうなんだろう」

分からない。

夢を見すぎていると、途中で転落するような気がする。必ずそうならないところが面白くもあり、苦しくもある。

所詮人は自ら経験したことぐらいしか、うまく説明できない。経験済みであってもうまくいかないことさえある。自らの経験に照らして言えば、「頑張ってもうまくいかない」ことも「頑張る術を知らない」こともあった。最初からどうにもならないことがあらかじめ分かっているとすれば、恋愛ほど単純なことはない。その難しさを追求するのが、この一連の行為の醍醐味なのだととしても、面倒だ。少なくとも俺には。半ばどうでも良いことに成り下がってしまったのだ。肉体的な快楽が欲しければ、金さえ払えば処理できる。安寧で安楽な時間と空間が得たければ、温かいものでも飲んで早々に布団に入るべきだ。総じて学生は寝不足なのだから。

ああ、だが。知っている。知っているとも。そうした当たり前の安心感でないことは。この行為は何かしら中毒性を秘めているのだ。重々承知している。問題なのは、それを得るために恋をするという姿勢が果たして正しいのかどうか、ということである。今の時世、婚約を交わすまで貞操を守り続ける者はそう多くない。では、想いを告げるということは、「ゆくゆくは」と言っていることに他ならないではないか。

俺にだって、思い人はいる。

だが、肉欲を棚上げにしておきながら人を想うなどということは、既にありえないのである。純粹にそれができたのは恐らく学童の頃までだ。

好きだから肌を触れあわせたいと思うのか、あるいはその逆か。そう問われれば多くの人は前者を選ぶだろう。

本当に？

俺にはよく解せない。

ある場所をじっと見つめていたことに気づいて、俺は目を逸らした。

そこには小さなぬいぐるみが居座っていた。まだ俺に相手がいた頃、もらったもの

だ。誰に？ 訊かないでほしい。

面倒くさい。でも、いるに越したことはない。何とも難儀なものである。

懐かしい人影を見つけたのは近所の洋菓子店であった。

「マナナ先輩？」

「誰だね、私をその名で呼ぶのは」

文字通り口にもものが詰まった言い方だった。

「これは久しぶり。いかにも私と君は先輩と後輩で、それ以上でもそれ以下でもなかった気がする」

愛菜(まなな)先輩はもそもそとシュークリームを嚙りながらそう言った。

「払ったんですか、ちゃんと」

「何？」

「お金」

「失敬な」

言って先輩はクリームの付いた人差し指を吸った。ショーケースの前でこんな姿を晒してられるのも、この店が先輩の知り合いの店だから、そして客が全く居ないからだ。

「居るじゃん、客」

「先輩と俺だけですけどね」

それにしても危うく気がつかないところだった。先輩は髪を切っていたのだ。切ったと言っても、セミロングがボブになった程度なので、バツサリと、という形容が適切なかどうかは分からないが。

「失恋ですか？」

「アノハ。女が髪切ったからって全部破局だと思うなよな」

先輩はケタケタと笑った。飾らない出で立ちでは以前と変わらない。フードトレーナーにジーンズ。背が高く、細身の先輩には割とシンプルな作りの服がよく似合う。だが一歩間違えるとゴミ出しに来た寝起きの学生のように見えなくもない。

「東京という街はもう少し人をお洒落にさせるものだと思ってました」

言う先輩は、

「こっちに帰ってきてまで窮屈な格好したくないからね」

確かに、コンタクトではなく眼鏡を使っている。普段着ってことなのだろうか。

「じゃあ向こうでは割と？」

「や。そんなことないわ」

じゃあ結局何も変わらないじゃないか。環境が変わったからと言って何もかも変わるというのは間違いかもしれない。

「先輩らしいですね」

「ありがと」

あんまり褒めてはいないのだが。

先輩はいそいそとショーケースの後ろに回ると、今度はタルトの一片を手を取った。ホイップの上に控えめな大きさの苺が乗っている。

「代金は」

「着払い」

そう言ってニコニコしながらその鋭角を口に差し込む。それを言うなら着払いじゃなく前払いだろう。

「やー。戻ってくるとこれが楽しみだね」

そうだ。どうして地元に戻ってきているのだ。暇人め。

「暇人じゃないよ。今は帰省中ー。パラサイトー」

「それじゃ寄生虫ですよ」

「ちょっと。食べてるのに。やめてよね」

あんたが言い出したんだろう。

「お前がまた悩んでるかと思ってさ。帰ってきてあげたの」

え。と一瞬考えたが、

「そんな訳ないでしょ」

「あるよ。あんた、春になるといつも頭抱えてたじゃん。ダンゴムシみたいに」

「だからって」

「冗談」

先輩は指をペロペロと舐めた。もう食ったのか。

「再就職活動中」

ホントかよ。

「いや、そこは疑わなくてもいいんじゃない？」

希望の職になかなか就けないこの時世に昼間からケーキをもさもさ口に運ぶ生き物。人の仕事の邪魔はしていても、職を探しているようには到底思えない。

「こっちですか？ 就職」

「さあ。今流行りのニートでも悪くないかなあ」

「いや、悪いでしょう。どう考えても」

「フン。学生風情にとやかく言われたくないね！」

そう言ってベー、と舌を出している先輩だって、つい去年までは学生をやっていたはずだ。

学生と社会人とは顔つきが違う、とは言うものの、先輩を見ていると何だか気が抜ける。妙に安心するところもあるのだが。

もう甘いものには満足したのか、湯気の立った紅茶をすすっている。スポンジが焼ける香りのせいでよく分からないが、どうやらアップルティーを煎れたらしい。

「僕だって就活中ですよ」

「調子どう？」

「インターンでも好印象でしたし。先輩とは違います」

「何だと！」

先輩は口を尖らせた。知っているのだ。先輩はギリギリ滑り込みで知り合いの事務所に転がりこんだことを。当初はしきりに有り難がっていたが、今ではこの有様である。「再就職」ということだから、クビになったのだろうか。化けの皮がはがれたに違いない。

「どうせだからお茶飲もうぜ」

「いいんですか？ 就活は？」

「ん。終わった。ゲーセン行く？」

終わったって何だよ。そして次はゲームか。どれだけ蕩(とろ)けてるんだ、この人の頭は。

「行きません」

「タバコ苦手だもんね」

じゃ、お茶飲もうか。そう言って先輩は店の奥に向かってアップルティーのオーダーを一つ追加した。もう、勝手にすればいい。

この店はテイクアウトできる店の隣に、カフェがくっついている。先輩と俺はそちらに場所を移した。

「最初からこっちで食べればいいじゃないですか」

「憧れるじゃん。ショーケースの中でキラキラしてるケーキを好きなだけ食べるっていうの」

おとなしくケーキバイキングに行けよ。

「そう、それ！ ケーキバイキングね！ いやー。女の子がアレにはまる理由は、小さい頃から私みたいな夢を抱いているからのよ」

「ホントですか？」

「ホントホント。本当と書いてマジよ」

そりゃ「本気」と書いて「マジ」の間違いだろう。何に影響されたんだ。まったく。

「しかし、タロウ君？」

「タロウじゃないですよ」

「……ハハハ。忘れる訳ないよジロウ君？」

覚えていないのか？ 何か今、「あれ？」って声が聞こえたぞ。

「……冗談冗談。ちゃんと覚えてるって、サロウ君」

サブロウじゃないのか、そこは。

しかし展開が読めてしまった。面白くないなあ。

「もう良いですよ。答えどうぞ、答え」

「お久しぶりです！ シロウ君！」

「ゴロウです！」

どうしてカフェで漫才をしなければならないのか。客もいないのに。もちろん居たら居たで恥ずかしいだけなのだが。

「悟朗君。甘いものダメじゃなかったっけ？」

先輩は皿に盛られたトルテをフォークで突いていた。ザッハトルテとか言う、チョコレートケーキにホイップが乗った奴だ。なぜそんなに糖分を大量摂取できるのか。

「口の中が酸っぱくなるのが嫌なんですよ」

「うん。歯を磨こう。君は歯を磨いていないのか？」

そんな訳ないじゃないか。

「そういうときにキスすると何か変な気分だよ」

「しませんよ」

しかもどんなディープなキスを想像してるんだこの人は。

「フレンチキスしか知らない悟朗坊やには、甘いものがお似合いだと思うんだけどなあ」

何か癪に障る言い方だな。

「ケーキより和菓子の方が好みなだけです。約束がなかったら買いません」

「ケーキが約束？」

「ええ。友人に連れができたら、お祝いするっていうね」

「変わってるねえ」

と、フォークを口に入れながら返事をする。どちらかと言えば先輩の方が変わっていると思うが。

「気持ちですから。いいんですよ」

「でもそれだと君、あげてばっかにならんか？」

「別に僕の知り合い全員に対して約束してる訳ではないですしね」

慈善奉仕ではないのだ。たまたま甘味と生クリームをこよなく愛する友人がいるというだけで。

「で、悟朗君はもらったのかね？」

それは端的に俺に彼女がいるか、ということを知っているのだろうか。

「いませんからね」

もちろん、実際に欲しいのはケーキでなく彼女である。

別に誰も訊いていないのに、特定の相手がいる者、特にできたばかりの者は幸せそうな話を周囲にばらまき始める。それはつまり、気持ちが溢れだしているのだ。自分で湧き上がる気持ちをどうしようもできない。おお、ラヴィ・アン・ローズ！

しかし、時にその空気は相手のいない者にとっては多大なダメージを与えたりするものだ。この胸にたくさんのトゲが刺さっているのがお分かりいただけるだろうか？

「そんなのごろごろしてるよ。人口の半分は女だよ」

「その中には明らかな対象外も含まれてるじゃないですか」

三割半は年齢的にどう考えても対象にならない。また、別の三割半も、同じく年齢的にかなりの冒険を強いられる。もちろん、将来のこととか、そんなことを抜きにすれば話は別かもしれないが、母親と同じ年齢、祖母と同じ年齢の人と恋愛関係を築くというのは、いろいろな意味で歪(いびつ)だと思う。そしてもちろんあまりに幼すぎれば、そもそもそういう関係を築くことができない。

つまり、実際に恋愛対象となりうるのはこの地球上に住む人間のおよそ十五パーセントということになる。すれ違う女性が十人居れば多く見積もってもそのうち二人。そして、悲しいかなその二人は同じ気質でもなければ同じ顔でもない。趣味も嗜好も

何もかも全てが異なる。選り好みしている訳では決してなくても、自分にピッタリ合う人間を捜し出すのは難しい。他の全てをうっちゃって恋路に邁進することができれば可能かもしれないが、それはそれで相当悲しい人生である。

それに。

「いいな、と思う人にはもう既に相手がいるんですよ」

致命的で、ある意味当然の問題なのだ。

その相手とうまくいってなければ、巧妙に打算的に。破局させて、自分が後釜に収まってしまえ。そういう考えの者も少なからずいる。

カッコウの雛じゃあるまいし。

自然にそうなるのであれば別だが、計算ずくで動くのは俺は嫌いだ。逆に別れさせられる側に立たされたときに虚しいから。自分で自分の行動に胸を張れないのは辛すぎる。

「そればかりは、君の言うように一言でバツサリ言い切れない部分があるけど」

いろんなパターンがあるから、と先輩。別れた方が幸せな場合も、そうでない場合もある。知ってるさ。そんなこと。

「言い方悪いけど、下手な鉄砲何とやらで良いんじゃない？」

いや、良くないでしょ、そこは。

「同時に複数の人を好きになる生き物なんだからさ、男ってのは」

いいじゃんそれで、と、先輩は名残惜しそうに皿に残ったクリームを集めていた。

「とっとと契約結んじゃってから考えるってのも悪くないと思うよ」

「契約、ですか」

「うん。コイビトってのも一種の契約だとは思うぜー」

裏切らないからそっちも裏切らないでくれってことだろ？ と先輩。なるほど。一人の人を好きでいる、という覚悟みたいなものかもしれない。

「でも、先輩、作るなって言いませんでした？」

以前話をしたときに、彼女いなくても大丈夫だ、とか何とか言われた気がするのだ。それを理由に求めなかった訳では決していないのだが。

「言ったかなあ」

覚えてないのか。マナナ先輩らしい。

「どっちかって言うと私は、無理するなって言った気がするんだけどな」

ああ。

言われてみればそんな気もする。あれは確か、あまりに周りが幸せそうな顔をしていると言って先輩に泣きついたときだ。涙をこぼした訳ではないが。失恋によって俺は疲弊していたのだ。

「何か焦ってたろ」

そう、疲れて、そして焦っていた。「恋人が途切れたことがない」とか、そういう状況に意味もなく憧れていた。だって、そういう人の方がキラキラして見えるじゃないか。言ってみたかったのだ、そういう台詞を。一度で良いから。

「あれからは？」

「先輩が出てってからまだ一年ですよ？」

そうそう簡単に良い人など現れない。キレイだから、かわいいから、それだけで選ぶことなどできないのだ。

「な？」

同意を求められても。何が？

「彼女なんか居なくてもちゃんと息はできる。心臓もちゃんと動いてくれる」

先輩は両手を大きく広げた。フォークを指に挟んだまま。危ない。

「生きていくのに支障ないだろ？」

フォークでこちらを指さないでほしい。本気でびっくりした。

「心が痛むとか、寂しさが辛いとか言うけど、全部まやかしだよ」

いや、さすがにそれは過言だろう。事実苦しいものは苦しいぞ。

「病気じゃないじゃん？ むしろ恋愛してる方が病気みたいな人、大勢いるし」

ドラッグっぽいところあるからね、と先輩は影のない健康そうな顔で言う。薬なんて

絶対やったことないくせに。

「恋に溺れるって気持ちいいよなあ」

「そうですかね？」

だが、まあ。気持ちいいとも。

「這い上がれないって自覚した瞬間、目の前真っ暗になるぐらいにね」

どういう状況だそれは。

ああ。

俺か。

恋に溺れ、抜け出せなくなって、藻掻いて藻掻いて、やっと岸まで這い上がった。今度はそうあるまいと、岸辺で水浴びをしている彼女を見ていた。彼女はもっと沖に泳いでいってしまった。俺は体操座りで黙考しているより他にはなかった。

先輩が俺の苺ショートを狙っている。

ショートケーキってというのはどうしてこう食べづらいのだろう。切り崩していくといつか横に寝てしまう。最後まで苺を乗せておくことはとても難しい。「もーらい」

そうしてまごまごしている間に苺を取られてしまうのだ。あまり腹も立たない。その苺は、最初から自分のものではなかったのだ。

その人は、最初から自分のものではなかったのだ。

苺は酸っぱかったらしい。先輩は渋い顔をしていた。ざまあみろ。

「ホイホイ寄ってくると思う？」

先輩はなぜか煎茶をオーダーしてから、俺に向き直った。

「自分が何とかすれば、自分が悪いところ直せば、相手は勝手に付いてくると思ってる？」

言葉を返せなかった。その通りだからだ。どうせ誰からも相手にされないのは、自分が全て悪いから。

「そんなの全然違う」

チッチッチ、と口に出しながら先輩は長い人差し指を振ってみせた。

「そんなに甘くないよ」

しかし目は真剣だった。何だか射抜かれたように固まってしまう。

「どっちかから、動かすしかないんだ。待ってちゃ何もやってこないよ」

待ってちゃ何もやってこないよ。俺はその言葉を頭の奥で反芻(はんすう)した。

「まずあんたが動かしてみろよ」

だが、それは難しい。俺にだって思い人はいる。でも俺のことなど何とも思っていないなかったら？ 嫌っていたら？ 言葉の、態度の端々からそんな気配を感じる。あるいは、もう良い人がいるのかも。それなら納得だ。だから無意識のうちに俺を遠ざけていたのだ。酸っぱい苺である気がするのだ。

知ってるよ。それが現実だ。

「できないんだろ？」

できないさ。簡単じゃない。

「じゃ、一生無理だね。そのまま居れば？」

ぐ、と思わず声が出てしまう。

「誰の世界だよ、ここは。あんたの世界だろ」

そんな風に考えたことはなかった。いつだって、俺とは別の人間が世界の真ん中にいた。

「自分で変えてみせろ。自分で掴め。私は何もしてやらないよ。ベロベロばあ」

煎茶が運ばれてきた。茶柱が立っている。

「な？」

と言われても。

「このメニューに緑茶なんかはないんだよ。でも頼んだら出てくるんだ」

そりゃ先輩の知り合いが働いてるから、という言葉飲み込む。

「動かしてみろよ」

飲み込んだ理由は、気づいたからだ。欲しいと思っても頼んでみなければ、どうなるか分からない。

「よし！」

眼鏡が光る。嫌な予感。

マナナ先輩はすくっと立ち上がると、奥に向かって大きな声でこう言った。

「悟朗君がバター茶欲しいってさ！」

「言ってません！ 絶対言ってません！」

キャンセルキャンセル！ 誰が好んでケーキにバター茶を付けるのだ。甘いものに甘い飲みものなんて絶対喉を通る訳がない。

「その調子その調子」

先輩は嬉しそうに笑っていた。くそう。違うぞ。こんなの絶対違うぞ。

人の恋路は面白い。対して自分の恋路は辛く険しいものである。

先輩に感化されたから、というのが若干癪(しゃく)ではあったものの、俺は俺の思い人を恋人にするべく計画を練り、斜陽差し込む夕刻六時、大学のアトリウムに彼女を呼び出した。

「なあに？ 用事って」

それはとても清々しい笑顔であり、俺は確信したのだった。

「ああ、実はな……」

前進あるのみ。猪突猛進。我一人座して見るは何ぞ愉しきや。

だから俺はコクった。

そして、フラれた。

これ以上ないくらい高らかに先輩は哄笑するのだった。酷すぎる。

「お前、それホントに親しい人だったの？」

知らないよ。こっちは良かれと思っても、そういうことはある。向こうがどう思ってたかなんて、知る由もない。

「スキマを狙わなきゃ。彼氏いないかいるか、とかさ。情報を仕入れないとダメだよ。まず食事から誘ってみるとかさあ」

この間と言ってることが違うじゃないか。まず自分で動かしてみろって言ったのは誰だ。

「やー。こんなに早く行動に移すと思わなかったんだよ」

イッヒッヒ、と意地悪く先輩は笑った。定めてこの結末を予想していたに違いない。忌々しい。やりきれない。悔しい。惨めだ。

「でもさ」

先輩が振り向くと、色素の薄いボブが揺れる。

「素直にそうやって動いちゃうところは、お前の良いところだよ」

それは、一年前と変わらない先輩で、俺はその昔、先輩に淡い想いを寄せていたことを、ほんの少しだけ思い出した。

「それで良いんだよ。動かなきゃ変わらないんだから」

先輩の声は優しくかった。

「頑張れ。大丈夫」

ああ、そうか。

俺は何となく理解した。

頑張る。きっとそれは前に進むことだ。立ち止まらないことだ。恋愛は一つのオプションに過ぎない。

恋路を選んだからと言って、座して安寧を求めるだけではダメだ。足を動かしていないのだから。待っているだけでは結局辛い。こちらから動かなければ。オプションを選択しようがするまいが、その姿勢は変えるべきでない。

前に進もう。頑張ろう。

先輩の就職とは、いわゆる永久就職だった。こちらに帰省していたのも、親への挨拶のためということらしい。確かに「就職活動」は既に終わっていたという訳だ。つ

いではいばば貪るように喰らっていたケーキも、洋菓子店店主からの、ささやかな前祝いであつたらしい。 マナ先輩は頑張ったのだ。

願わくは、俺も。

それは春風のようにだった。何の前触れもなく訪れ、凍り付く季節を押し流していく。そして吹き抜けた後、いつの間にか春になっている。

「別にお前の先輩でなくなる訳じゃないよ。東京に来たら遊びにおいで」

春をもたらす先輩は、いつも朗らかだった。

「そんな悲しそうな顔するなよ」

「してません」

でもたぶん、俺は泣きそうな顔をしている。嬉しさと寂しさが入り交じった。そんな気持ち。バレないように何となく、丁寧に背を向ける。

もう少しこの風の暖かさに浸っていようか。あるいは……。

それは明日の俺が決めてくれるだろう。昨日の自分は、今日の俺とは少しだけ違う。明日の俺はまたわずかに別の存在に変わるだろう。劇的に自分を変えることなどできない。少しずつ。一歩ずつで良いのだ。

焦ることなんてない。

それがなくなつて、ゆっくりとこの世界は回るのだから。

「行くよ」

ああ、行こう。

強い追い風が吹き抜けた。きっとこれは良い知らせなのだ。だってそれは、先輩のいる場所から吹いてきたのだから。

どこか懐かしい風。

かき立てられるような、強い風。

それは、春を告げる風——ヘラルディング・ゲイル。

[戻る](#)